

# 現代インドの環境運動とガンディー主義 — テーリー・ダム反対運動を事例として

石坂晋哉

はじめに

現代インドの環境運動について語る際に、ガンディー主義<sup>1)</sup>の思想・実践の影響について触れないわけにはいかない<sup>2)</sup>。ガンディー主義の思想・実践は、独立運動以来、インドのさまざまな社会運動に強力なインパクトを与え続けてきたが、環境運動もその例外ではない。本稿は、インドを代表する環境運動のひとつ、北インド・ウッタラカンド地方のテーリー・ダム反対運動において、ガンディー主義の思想・実践が果たしてきた役割について具体的に明らかにするものである。

テーリー・ダム反対運動は、インド最大の河川ガンガー（ガンジス）川上流域に建設中のテーリー・ダムに反対する運動で、1978年に始まったものである。これまでのテーリー・ダム反対運動研究としては以下の三点が挙げられる。

第一に、運動の1992年までの展開について調査したプリヤの研究<sup>3)</sup>。彼女の研究は、運動の最盛期に行われた地道なフィールドワークに基づいており、臨場感あふれる貴重な資料となっている。第二に、地元ウッタラカンド地方の歴史家パータクによる研究<sup>4)</sup>。彼は、ウッタラカンド地方でテーリー・ダム反対運動に先立って展開した有名な森林保護のチプロ運動<sup>5)</sup>を「農民反乱の文化」の伝統の連続性のうちに捉えたラーマチャンドラ・グハ<sup>6)</sup>と同様に、テーリー・ダム反対運動をウッタラカンド地方の社会運動史のなかで捉えるべきだと主張している<sup>7)</sup>。またパータクは、テーリー・ダム反対運動は結局「失敗に終わった」と捉えており、特にその1992年以降の新しい展開について正当に評価していない点が問題である<sup>8)</sup>。第三に、人類学者モーズレイの研究がある<sup>9)</sup>。彼女のこの論考は、インドのヒンドゥー・ナショナリストたちによるテーリー・ダム問題の政治的「利用」という点が主題となっているが、彼女はテーリー・ダム反対運動について、その「地元住民の経済合理的」な側面を強調している<sup>10)</sup>。

これらの研究に対し、本稿は主に以下の二点について論じる。

---

\* 本稿のもととなった現地調査は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の21世紀COEプログラムによるフィールドステーション派遣等派遣経費（2003年8月-9月）と平成16年度京都大学教育研究振興財団第1号事業・海外派遣助成（2004年7月-2005年3月）とによって実現した。また本稿の議論は、環境社会学会第33回セミナーにおける発表の場で深められた（2006年6月23日、新潟・阿賀野川）。ここに記して感謝いたします。

第一に本稿は、テーリー・ダム反対運動が、地元社会に限定されない広がりを持ち、さらにいわゆる「新しい社会運動」<sup>11)</sup>などとも通じるような現代的意義をもつ運動である点を強調する。テーリー・ダム反対運動は当初たしかにモーズレイが主張するような「地元住民の経済合理的」な要求からスタートした。またその背景にはパタクらが強調するような「ウッタラカンド地方における社会運動の経験の蓄積」があったのも事実であろう。しかしテーリー・ダム反対運動は、生活防衛型のローカルな住民運動にとどまらず、1980年代以降は地域外からの参加者を数多く取り込み、さらに1992年の「ヒマラヤを救え運動」宣言によって政策提言型の環境運動としての性格をもつようになったのである。

第二に本稿は、テーリー・ダム反対運動の展開においてガンディー主義が大きな役割を果たしてきた点を明確にする。先行研究では、運動指導者であるガンディー主義者のスングラルール・バフグナの役割について、「運動がバフグナ中心になった」<sup>12)</sup>「彼の個人的英雄主義、特に断食は、人々の運動への参加を思いとどまらせた」<sup>13)</sup>「一人の人物への過度の追従・依存による問題は、意見や態度の相違、戦略や行動における相違が軽視される傾向にあるという点にある」<sup>14)</sup>など、もっぱら批判的に、運動に対する「負」の影響が強調されて捉えられてきた。しかし本稿では、バフグナらのガンディー主義者ネットワークが運動の動員手段として非常に重要であったこと、さらにバフグナのガンディー主義思想こそが、テーリー・ダム反対運動がグローバルな意義をもつようになっていく際の重要なバックボーンとなっていた点を明らかにする<sup>15)</sup>。

## 1. テーリー・ダム問題の概要<sup>16)</sup>

テーリー・ダムは、ウッタラカンド地方東部、ガンガー川上流域（バーギーラティー川とビランガナー川の合流地点のテーリー (*tihari*)）に建設中の大規模ダムであり、発電（最大2,400 MW）、灌漑（主にウツタル・プラデーシュ州西部）、飲料水確保（デリーなど）、洪水制御という諸機能を併せ持つ多目的ダムである。これは巨大なプロジェクトであり、ダムの堤高は世界第6位の260.5 m、水没面積は7,511 km<sup>2</sup>、完成するとテーリーの町と周辺約40村が完全に水没し、立ち退き者の総数は少なく見積もっても7万5,000人以上となる。建設主体はテーリー水力開発公団 (Tehri Hydropower Development Corporation) である<sup>17)</sup>。

テーリー・ダム問題は争点が多い。具体的にはまず、ダム決壊のリスクや貯水池誘発地震の危険性などに関する技術的・工学的問題が挙げられる。また、立ち退き・補償や「ダムは地元にとってデメリット」という議論などの社会的問題、ダムの費用便益効果や建設関連の汚職問題などを含めた経済的問題も、テーリー・ダムをめぐる大きな争点であった。さらに、水質悪化や森林伐採などの環境問題、歴史的建造物の保護などをめぐる文化的問題、国境地帯にダムを作ることをめぐる安全保障の問題なども指摘されてきた。こうしたさまざまな論点をめぐってさまざまな立場の者が対立し、一方では、政府や大企業などの強力なバックアップのもとにダム建設が進められ、他方では以下にみるように、地元住民やインド各地

の市民団体などとの連帯のもとで強力な反対運動が展開された。

## 2. テーリー・ダム反対運動の展開

テーリー・ダム反対運動の展開は、以下の三つの局面に分けて整理することができる。

### 2.1. 第一局面 運動の誕生（1970年代）

テーリー・ダム反対運動は1978年に本格的に始まった<sup>18)</sup>。ダム建設着工直後の1978年1月24日、ダム立地点テーリーにて、テーリー・ダム反対闘争委員会 (*tihari bāndh virodhi saṅgharṣ samiti*) が設立された。委員長には、いかなる特定の党派にも属していないという理由から、インド独立運動経験者の弁護士 V. D. サクラニーが選ばれた。4月10日にテーリーでデモ集会が行われ、4月24日にはダム建設工事を中断させることに成功、6月1日には運動参加者のなかから初の逮捕者が出て、逮捕者数は6月17日までに97人（うち63人が女性）に膨れ上がった。また8月14日には、8,000人の署名とともにインド連邦下院にダム建設計画見直しを求める請願書を提出した<sup>19)</sup>。その後も、テーリー・ダム反対闘争委員会を中心として、デモ集会、座り込み (*dharnā*)、断食 (*vrata*)、行脚 (*pad yātrā*) などが繰り返行われるとともに、法廷闘争（1985年11月インド最高裁提訴<sup>20)</sup>）なども行われた。

運動参加者には、当初から多くの女性や学生などが含まれていた。また、この時期のテーリー・ダム反対運動には地元の主な政党のすべてが積極的に関与していた。この時期の運動の成果としては、インディラ・ガンディー首相の指示により1980年2月に S. K. ロイを委員長とする環境評価委員会が設立された。

この段階のテーリー・ダム反対運動は、ダム立地点の住民による生活防衛型の住民運動だったといえる。すなわち、運動参加者は基本的に地元住民に限られており、運動の主な目的は、(1) ダム建設の阻止（あるいは計画見直しの実現）と、(2) 立ち退き者に対する適切な補償や代替地の確保であった。この時点ではこの運動は、地元に大きな不利益をもたらす大規模ダム建設に反対するだけで、例えばそのダム建設に替わる本格的な代替策を提示するといったことは行われなかったのである。

### 2.2. 第二局面 運動の拡大（1980年代以降）

1980年代に入るとテーリー・ダム反対運動は、拡大していくとともに、単なる住民運動ではなく、市民運動としての特徴をも備えるようになっていった<sup>21)</sup>。すなわち、当初は地元住民のみに限られていた運動主体が多様化したのである。具体的には以下の三点を指摘しておきたい。

第一に、ダムの恩恵を受ける下流域にもダム決壊時の洪水というリスクがあることを強調することを通じて、下流域住民の運動への取り込みが図られた<sup>22)</sup>。

第二に、インド各地のさまざまな分野の専門家やジャーナリストなどオピニオン・リーダー

ーが運動と密接に結びつくようになっていった。例えば、デリーの NGO、INTACH (Indian National Trust for Art and Culture) 所長の N. D. ジャヤルの強力なサポートによってテーリー・ダムをめぐる専門的調査が行われ、その成果<sup>23)</sup>はダム反対の重要な根拠になるとともに、テーリー・ダム問題が広く論じられるきっかけとなった。また、世界的に著名な環境主義者ヴァンダナ・シヴァや、インドを代表するフェミニストの一人マドゥ・キシワル、ガンガー川の聖地リシケーシュを拠点に活動し幅広い層から崇敬されてきた宗教家スワミー・チダーナンダ・サラスワティーなども、テーリー・ダム反対の立場からさまざまな場で発言を行うようになった<sup>24)</sup>。これら各界の有識者たちの発言によって、インド全国レベルにおけるテーリー・ダム問題の認知度は急激に上昇したのである。

第三に、1980年代以降のテーリー・ダム反対運動は、他のダム反対運動、特にナルマダー・ダム反対運動と連帯し始めるようになった。ナルマダー・ダム反対の強力な論陣を張ったジャーナリスト、クロード・アルヴァレスはテーリー・ダム反対の世論形成にも大きな役割を果たした<sup>25)</sup>、ナルマダー・ダム反対運動の指導者メダー・パトカルは、1995年5月5日に、テーリー・ダム反対運動に参加したことで逮捕されたほどである。また、後述するが、このナルマダー・ダム反対運動との連帯は、テーリー・ダム反対運動が1992年に「ヒマラヤを救え運動」という新たなフレームを獲得する際の重要な背景となった。

さて、この段階でテーリー・ダム反対運動は、指導者の交替を経験することになった。当初の指導者であった V. D. サクラニーは1989年に病に倒れ、彼の希望により、インドを代表するガンディー主義者の一人スンドラルール・バフグナ<sup>26)</sup>がこの運動の新しい指導者になったのである。バフグナは1970年代からすでにテーリー・ダム反対運動に関わってきたが、1989年以前はあくまでも運動の有力な活動家の一人にすぎず、彼自身はテーリー・ダム水没予定地の外にある村（スイリヤーラー村）のアーシュラム<sup>27)</sup>に住んでいた。しかし、独立運動当時から親友 V. D. サクラニーに説得され、また1989年9月28日にナルマダー川流域のハルサドで開催されたダム反対の国際集会（通称ハルサド大会）に参加した際に、巨大ダム建設を阻止するためにみずからのさらなるコミットメントが不可欠であることを自覚した。そして、「テーリー・ダム問題が解決するまでスイリヤーラー村のアーシュラムには戻らない」としてテーリーの町に移り住み、同年12月25日にテーリー・ダム反対運動の指導者になることを宣言したのである。この後、彼の存在とその行動が、テーリー・ダム反対運動全体の命運を左右していくことになるのは、以下にみるとおりである。

なお、テーリー・ダム反対運動の変質と同時に、この時期以降インド全体において「脱ダム」気運が盛り上がってきていたという点をここで指摘しておきたい。

インド独立後の経済開発のなかでダムは「現代インドの伽藍」（ネルー）とされ精力的に建設が続けられてきたが、1980年代以降、大規模ダムの建設数は大幅に減少した。その背景としては、第一に、大規模ダム建設の問題点（費用便益比率が実際にはそれほど高くない場合がある、環境への悪影響、立ち退きの問題など）が広く知られるようになったこと、第

二に、インド各地のダム建設反対運動が連帯するようになっていったこと、第三に、環境や人権（特に先住民の権利擁護）といった概念がインドの政策決定においても大きな影響を及ぼすようになったことなどが指摘されている<sup>28)</sup>。テーリー・ダム反対運動は、世界的な「脱ダム」潮流<sup>29)</sup>に乗りながら、ナルマダー・ダム反対運動などとともに、インドにおけるこうした「脱ダム」の流れをつくってきたのである。

さて、1990年代に入るとテーリー・ダム反対運動は最高潮を迎えることになる。1991年10月20日にウッタラカンド地方北西部で大規模な地震(M6.6)が起こり大きな被害が出た。その直後から、「地震多発地帯のテーリー・ダムは大地震に耐え得ない」という（従来からの）運動側の主張がメディアによって大きく報じられるようになり、それとともに運動が空前の盛り上がりを見せた。地元でも、立ち退きに対する不適切な補償とテーリー水力開発公団の汚職問題や手抜き工事疑惑などから、テーリー・ダム建設に対する批判が高まってきており、また、ダム建設の最大の資金源であったソ連が1989年に崩壊したため今後のダム建設の資金難が予測されたという事情もあり、運動はおおいに盛り上がったのである。

テーリーではさっそく10月29日に被災者救援の集会が開かれ、さらに12月14日にはテーリーで5,000人以上が参加してダム反対のデモ集会が開催された。そして、そこで始められたダム・サイトでの抗議の座り込み(*dharnā*)は、インド各地や外国からも多くの参加者を集め、山岳地帯の寒い冬の期間中にもかかわらず昼夜一貫して、翌年の2月27日に参加者が逮捕されるまで実に75日間も続けられた。

この75日間の座り込みについては、実際にこの座り込み期間中に現地調査を行った記録がある<sup>30)</sup>。それによると、主な座り込み参加者として名前が挙げられている36人中、実に17人が、それぞれガンディー主義アーシュラムに所属しているガンディー主義者であった。具体的には、まずウッタラカンド地方では、バフグナ自身のスィリヤーラー・アーシュラムからの参加者が9人（バフグナ本人とその家族を含む）、ウッタラカンド地方のガンディー主義者ネットワークの拠点ラクシュミー・アーシュラムから1人、ウツタルカーシー・アーシュラムから2人、その他のアーシュラムから4人。そしてマハーラーシュトラ州のガンディー主義アーシュラムから1人。ただしこの他にも、スィリヤーラーとラクシュミーの各アーシュラムからは、併設の小学校の児童がさらに数十人単位で参加している。

こうしたガンディー主義者たちは、座り込みのテントにおいて、いわゆる裏方の作業、すなわち座り込み参加者のための水汲みや炊事や洗濯、掃除などに積極的に従事した<sup>31)</sup>。75日間という長期間の座り込みが可能であったのは、ガンディー主義者たちのこうした背後の支えがあったからであったといっても過言ではない。テーリー・ダム反対運動の盛り上がりの裏には、ガンディー主義者ネットワークの力があったのである。なお、この座り込みの期間中（1991年12月14日-1992年2月27日）は、ダム建設工事は完全にストップした。

運動の高揚は、さらにこの後も衰えることがなかった。1992年2月27日深夜、座り込みをしていたバフグナたちが逮捕され、バフグナらはそのまま刑務所で抗議の断食(*vrat*)を始

めた。バフグナらは 10 日後に釈放されたが、テーリーに戻った彼らは再度ダム建設現場に続く道路の脇にテントを張り、バフグナはそのまま断食を続けた。「毎晩私は、翌朝目覚めたらわが友スダルラール・バフグナが亡くなっていたりする事のないよう祈りながらベッドに向かいます<sup>32)</sup>」といった記事にもみられるように、バフグナの断食はメディアの注目の的となった。また彼の断食はインド連邦議会の審議でも取り上げられ、下院議員ジョージ・フェルナンデスを仲介人として首相とのたび重なる交渉が行われた。その結果、工事の中断と問題の再調査の実施が決定され、バフグナは 4 月 12 日、実に 45 日目に断食を解いた。4 月 13 日付の *Hindustan Times* (英字版インド全国紙) は 1 面でバフグナの断食終了を伝え、他紙もこのニュースを大きく取り上げた<sup>33)</sup>。なお、これによって、ダム建設工事は 1994 年 12 月までの 2 年半、中断することになった。

そうしたなか、1992 年 3 月 20 日に、ダム反対運動にとって大きな痛手となる事件が起きた。その日テーリーで開かれたデモ集会に参加した住民たちが帰宅するために乗っていたバスが崖から転落し、少なくとも 16 人以上が死亡したのである。この路線バスには、デモ集会に参加した人々が多く乗っていたが、運転していたのは正規の運転手ではなく、その運転手はバスが転落する直前に脱出して無事だったがその後行方不明になったという。反対運動側はこの「事故」について詳細な調査を行うよう当局に再三要請してきたが、結局、十分な調査は行われず「事故」の真相は謎に包まれた。地元では今もこの「事故」はダム推進派によって仕組まれたものだったと理解されている。この事件によって住民たちはダム反対運動に参加する「リスク」を思い知らされ、この後、運動から距離をおこうとする者が多く出てきたのであった。

### 2.3. 第三局面 代替策の提示 (1992 年以降)

1992 年 5 月 15 日テーリーにて、3 日間にわたったデモ集会の締めくくりとして「ヒマラヤを救え運動 (*himālaya bachāo andolan*, Save Himalaya Movement)」宣言が出された<sup>34)</sup>。この宣言の骨子は次のスローガンに集約される。「水を引き上げよう (*dhār aimc pāni*)、山の斜面に木々を (*dhāl par dālā*)、水の流れから発電を (*bijli banāwā khālā khālā*)。」すなわち、大規模ダムの代わりに、川の流れを利用した小規模で環境に負担をかけない「流れ込み式 (Run of River Schemes) 発電」によって発電を行い、その電力を使って山の上に水を引き上げ、ヒマラヤ地域の長年の伐採で荒廃した山肌に植林を行い水源涵養林とし、アグロフォレストリーを推進する、というビジョンである<sup>35)</sup>。

この「ヒマラヤを救え運動」宣言によってテーリー・ダム反対運動が、ただちに全体として、これまでとは異なる運動へと変質したということとはできないであろう。しかし、社会運動を構築主義的に分析する潮流がすでに明らかにしてきているように、マス・メディアの報道なども含めた各種資源を動員する過程で、運動のフレームをいかに設定するかというフレーミング自体がしばしば運動の盛衰を大きく作用する<sup>36)</sup>。テーリー・ダム反対運動はこの

「ヒマラヤを救え運動」宣言によって、ここでまったく新しいフレームを獲得したのである。この「ヒマラヤを救え運動」の意義は以下の三点にまとめられる。

第一に、「ヒマラヤを救え運動」はヒマラヤの環境問題を提起する環境運動である。ダム立地点の地元住民による生活防衛型の住民運動としてスタートしたテーリー・ダム反対運動は、「ヒマラヤを救え運動」においては明確に、ヒマラヤ地域全体の環境の改善を運動の目的とすることになった。ここでは、ヒマラヤ地域の環境が森林消失や土壌流出などの環境悪化によって日常生活にまで支障が出るほどの危機的な状態にあるという認識に基づき、ヒマラヤ地域の環境改善と、ヒマラヤ地域の人々の生活を守るために、まったく新しい、長期的視野に立った統合的なヒマラヤ環境政策を打ち出している。すなわち、川の流れを利用した小規模な「流れ込み式発電」を行い、ポンプで水を山の上にも引き上げ、地場産業としてアグロフォレストリーを推進し、それを水源涵養林とする、というヴィジョンであり、これは地域の発展とガンガー川源流の枯渇防止という二つの重要な課題を同時に実現させようとするものである。なお、「ヒマラヤを救え運動」においては、テーリー・ダム問題はヒマラヤの環境悪化の重大な象徴と位置づけられ当然その解決がめざされるが、テーリー・ダム問題はあくまでもヒマラヤの環境問題の「ひとつ」とされる<sup>37)</sup>。

第二に、「ヒマラヤを救え運動」は積極的にオルタナティブの政策を提言する運動だといえる。運動として初めて正式に、ダムの代替策として「流れ込み式発電」を提示した。テーリー・ダム反対運動はこれまで、ダムに「反対」する運動であるため、「反開発」というレッテルを貼られて批判されることが多かったが、ここで本格的に具体的なオルタナティブを提起するようになったのである。

第三に、「ヒマラヤを救え運動」は運動参加者みずからの生き方を問い直すような「新しい社会運動」としての契機を含みもっている。すなわちこれは、「ヒマラヤを救う」という価値を運動の基盤に据え「いかに生きるか」を問い直す自己変容の過程であるということができ、そこにおいて価値志向型の「新しい社会運動」だといえることができるのである。ヒマラヤを救うためには、ただダム建設に反対するだけでなく、アグロフォレストリー推進の地元住民らによる主体的な取り組みが不可欠であり、住民自身がヒマラヤの環境に過度の負担をかけないライフスタイルを選択していくことの重要性が認識されているからである。

テーリー・ダム反対運動は、「ヒマラヤを救え運動」宣言によって、ヒマラヤの環境問題を提起する環境運動としての側面と、ヒマラヤの環境政策を具体的に示すオルタナティブ提言型運動としての側面、さらに「新しい社会運動」としての側面をもつようになったのである。

さて、その後（1992年以降）の運動の展開においては、重要局面においてスダルラール・バフグナが長期間の断食（*vrat*）を行うたびに、それが全国レベルのメディアによって大きく取り上げられるとともに、「ガンディー主義」を無碍にできないトップレベルの政治家への圧力となり、運動が盛り返しをみせるというパターンが繰り返されるようになった。

1992年の断食終了の条件としてナラシンハ・ラーオ首相は、地元住民の意見を聞く公聴会を開くことを約束していたが、それが実現されないまま1994年3月、内閣は、同年内に建設工事を再開させることを決定し12月には実際に工事が始まった。そのためバフグナは再度ダム建設現場に続く道を封鎖し、1995年5月、逮捕・投獄されたため、バフグナは無期限の断食を開始した。このとき運動参加者の多くが警官に竹棒 (*lāṭhī*) で叩かれてけがを負った。バフグナはアラーハーバード高裁の指示で数日後に釈放されたが、彼はテーリーに戻っても断食を続け、運動は盛り上がった。今回は、インド各地から集められてきていたダム建設工事作業員たちも運動に参加したのである。ラーオ首相は6月27日、計画の全面的見直しを行うという声明を発表し、バフグナは49日目に断食を終了させた<sup>38)</sup>。この断食終了のニュースも、*Hindustan Times* 紙は一面で報じた<sup>39)</sup>。

しかし、またしても、一年経っても計画の見直しは行われなかった。そこでバフグナは「(偽の合意という)嘘に加担してしまったみずからの罪」に対し、1996年4月13日に「贖罪の断食 (*prāyāścitt vrat*)」を開始した。この断食は、自然療法の医師の指示のもと、規則正しい日課が組まれ、ベルの実(胃腸の調子を整える効用がある)とレモンと蜂蜜だけは摂りつつ行われた。この断食は実に74日間も続けられ、バフグナは最終的に、テーリー・ダム問題をさらに世間に広く知ってもらうため、わざわざニューデリーのラージ・ガート(M. K. ガンディーが火葬された場所)にやってきて、そこでデーヴェー・ガウダ首相と会談した後に断食を解いた<sup>40)</sup>。各紙は写真つきでこのニュースを報じた<sup>41)</sup>。

バフグナはこの後も、1997年と2001年に長期間の断食を行い、そのたびに運動は巻き返しを見せた。こうした事例から明らかなのは、ガンディー主義は現在インドにおいて一種のブランドとしての機能を持っており、ガンディー主義者の断食は政治家たちに対して圧力になり、メディアもそれを格好のニュースとして取り上げるということである。テーリー・ダム反対運動の展開において、この「ガンディー主義のブランド機能」は、重要な役割を担っていたといえる。

この時期、地元テーリーの町では1996年から2000年まで、毎日早朝の5時から6時まで、ダム反対のデモ行進(通称「早朝巡行 (*prabhāt pherī*)」)が行われていた。それには毎回50-60人が参加し、「ガンガーを救え、ヒマラヤを救え! (*gaṅgā bachāo, himālaya bachāo!*) ヒマラヤを救え、国を救え! (*himālaya bachāo, deś bachāo!*)」「ガンガーの流れを止めるな! (*gaṅgā ko aviral bahnedo!*) 純正なガンガーの流れを止めるな! (*gaṅgā ko nirmal bahnedo!*)」といったスローガンを叫びながら行進した。なお、この「早朝巡行」が2000年に終わったのは、その年の5月頃からテーリーにあった政府機能がニューテーリーに移転し始め、住民たちが、自分たちもいずれ立ち退かざるを得なくなるだろうと考え始めたからだだったという。逆に言うと、その頃までは運動参加者たちはダム建設を中止させる可能性があると考えていたのである<sup>42)</sup>。

2000年代に入って、運動は表面的には低迷しているように見える<sup>43)</sup>。2000年から2001



年にかけてテーリーの行政機能がニューテーリーに移管され、テーリー住民の立ち退きも急速に進んだ。2003年9月には最高裁がテーリー・ダム建設は合憲とする判決を出し、運動側としては、法的にダム建設を阻止する手段がなくなった。そして2005年11月、すべての放水路が閉鎖され、テーリー周辺は完全に水没した。

運動衰退の最大の理由はおそらく、運動を組織化・制度化できなかったという点にあると思われる。テーリー・ダム反対運動の拠点は、テーリーの町への入り口の橋のたもとにあるバフグナが住む小屋であった。しかしこの小屋には常駐スタッフはおらず<sup>44)</sup>、また2001年に4本あるダム放水路のうち2本が閉鎖された際に、町の中でいち早く水底に沈んでしまった。

しかし、運動の現時点(2006年8月)までの成果として、以下の三点を指摘することができる。(1)ダム建設工事が何度も長期間にわたって中止された<sup>45)</sup>。(2)複数の環境評価委員会が設置され、ダム計画や地域の環境などをめぐり、さまざまな調査が実施された<sup>46)</sup>。(3)上述したことであるが、ナルマダー・ダム反対運動とともにインドにおける「脱ダム」の潮流を牽引した。このうち最後の点に関連するが、例えば、もっとも強硬なテーリー・ダム建設推進派であるN. D. ティワリー・ウッタランチャル州首相は、2004年8月に「テーリーのこのプロジェクトは、このヒマラヤの州における大規模な水力発電・灌漑プロジェクトとしては最後のものになるだろう。今後のプロジェクトは『流れ込み式発電』のみとなるだろう」と述べた<sup>47)</sup>。こうした州首相の発言の背景には、「ヒマラヤを救え運動」による「流れ込み式発電」の提唱の影響が存在していたとみて間違いではないだろう。

さらに、「ヒマラヤを救え運動」はウッタラカンド地方の外にも波及していつている。2003年には、南インド・カルナータカ州のカーリー川流域で「カーリーを救え運動(*kālī bachāo andolan, Save Kali Movement*)」が始まった。これは、製紙工場の排水などによるカーリー川の汚濁とダム建設による森林伐採と河川流量の減少などを阻止し、カーリー川流域全体の将来を見据えた政策を考えていこうとする運動である。この地では、かつてバフグナのアーシュラムを訪れてチプコ運動の理念と方法を学んだP. ヘグデ(1957-)が1983年以来「アッピコ(*appiko*=抱きつくの意)運動<sup>48)</sup>」を指導してきていたが、このヘグデらを中心として、新たに「ヒマラヤを救え運動」の影響を受けて、「カーリーを救え運動」が始められたのである。バフグナは2005年にこの地を訪れてカーリー川流域の行脚(*pad yātrā*)を行い、流域の住民たちが今後ますます運動に関わっていくことを期待すると述べた<sup>49)</sup>。

### 3. テーリー・ダム反対運動とガンディー主義

テーリー・ダム反対運動の展開においてガンディー主義が果たした役割は、次の三点にまとめられる。(1)スダルラール・バフグナらの「ガンディー主義者ネットワーク」が、運動の重要な動員手段となっていた。(2)バフグナのたびかさなる断食は、「ガンディー主義のブランド機能」によって、運動が盛り返すきっかけを作ること成功した。(3)1992年に

「新しい社会運動」としての「ヒマラヤを救え運動」が登場した背景として、ガンディー主義者バフグナ思想・実践の影響が重要であった。(1)と(2)についてはすでに前章で検討した。ここでは(3)について、具体的にバフグナのガンディー主義的環境思想と「ヒマラヤを救え運動」の理念とがどのような関係にあるかについて、以下に整理する。

まず「ヒマラヤを救え運動」は、ヒマラヤ地域外の諸勢力によるヒマラヤの自然資源の収奪に抗してヒマラヤ地域の自立をめざす運動である。しかし、それが地域エゴではないことを示すために、ヒマラヤの環境保全が地域外の人々にとっても結果的には必要不可欠であることを強調するだけでなく、ヒマラヤ地域の住民自身も含めて、環境に過度の負担をかけないようなライフスタイル、自律的な生き方を選択していくことが求められているところに特徴がある。このように、地域の自立と個人の自律を同時に追求しようとする在り方は、ガンディー主義のスワラージ (*svarāj*) 思想の特徴である。「スワラージ (*svarāj*)」とは、「*sva* (みずからの) + *rāj* (統治)」であり「独立=自治=自己統治」を意味するが、ガンディー主義の概念としては、(a) 他者による支配からの脱却としての「自立」と (b) 欲望を制御し真理をめざす善き行い (*sudharo, sadācār, good conduct*) としての「自律」という二つの契機が密接に組み合わせられている<sup>50)</sup>。バフグナはこのうち特に後者の「自律」の側面について、「簡素・禁欲 (*Austerity*) (*sādgī, simplicity* あるいは *samīyam, restraint*)」の生き方の必要性というかたちで表現し、そうした生き方の重要性を折りに触れて強調している<sup>51)</sup>。

また「ヒマラヤを救え運動」によるオールタナティブの提案の背景にもバフグナ思想の強い影響をみてとることができる。「ヒマラヤを救え運動」は、ヒマラヤ地域の植林・アグロフォレストリーの推進を提唱している。実は、このアグロフォレストリーの振興というのはバフグナのかねてからの持論であった。バフグナは具体的には「5F」の樹木を以下の優先順位で栽培していくことを提唱している<sup>52)</sup>。(1) 食物 (*Food*) 用の樹木。このなかではとりわけクルミやクリなどのナッツ類が、そして順に、食用種用、油種用、果物用、蜜用の樹木が優先されるべきである。(2) 飼葉 (*Fodder*) 用の樹木。(3) 燃料 (*Fuel*) 用の樹木。(4) 肥料 (*Fertilizer*) 用の樹木。(5) 繊維 (*Fibre*) 用の樹木。なお、バフグナによるこのアグロフォレストリーの提唱は、彼のガンディー主義的「サルヴォーダヤ環境思想」の重要な一部を構成している。「サルヴォーダヤ (*sarvodaya*)」とは「万物 (*sarv*) の向上 (*uday*)」を意味するが、バフグナによると、ヒマラヤ地域に最適の「万物の向上」の在り方はアグロフォレストリーである。なぜならアグロフォレストリーは、長年の森林消失による環境破壊を食い止め、地元住民の社会生活の存続と繁栄を保障し (食物・飼葉・薪・肥料・繊維のもととしての樹木の育成)、ガンガー川源流地域の水源涵養にもつながるからである<sup>53)</sup>。

さらに「ヒマラヤを救え運動」がヒマラヤ地域全体の環境問題に取り組み始めることができた背景として、バフグナの「ヒマラヤ行脚 (*himālaya pad yātrā*)」についてもここで言及しておくべきであろう。バフグナは 1981 年から 1983 年にかけて、ヒマラヤ地域の環境状態を自分の目でチェックし、そこに住む人々に対して環境保護の重要性を直接訴えるために、

ヒマラヤ山脈の西端カシミールから東端コヒマ（ナーガランド州）まで 4,870 km を歩く「ヒマラヤ行脚」を行った。彼は各地の環境状況を調査し、その土地に住む人々（政治家、官僚、科学者、学生、一般の住民）との会合を開いて意見交換をし、地元政府に対して環境状況についての報告書を提出した<sup>54</sup>。この行脚によってバフグナは、ヒマラヤの環境問題のスベシヤリストとしての地位を獲得したといえる。「ヒマラヤを救え運動」は、バフグナの存在をもってしてはじめて、ヒマラヤ地域全般の環境問題について堂々と発言することができるようになったといっても過言ではない。

このように、テーリー・ダム反対運動が「ヒマラヤを救え運動」という新たなフレームを獲得できた背景には、スダルラール・バフグナの強い影響があったのである。

しかし実際には、バフグナのガンディー主義思想に基づく「ヒマラヤを救え運動」の理念は、地元住民たちに十分に共有されているとはいえない。むしろ 2005 年の時点では、地元住民の間でバフグナの人気は非常に低かった。そうした状況の背景として、地元ではバフグナに関する悪い噂（「バフグナは外国から多額の金をもらっており、彼が断食をするのは外国から金を得るためだ」「バフグナは自分の子供たちだけには外国製の服を着せて贅沢をさせている」など）が意図的に広められてきたという指摘もある。そしてそもそも、みずからの生き方を簡素・禁欲を基調とするものへと根本的に変革することを求めるバフグナは、多くの地元住民にとっては、いわば「敬して遠ざけたい」存在のようである。テーリー・ダム反対運動はスダルラール・バフグナという「キー・パーソン」<sup>55</sup>を通じて「ヒマラヤを救え運動」という「新しい」フレームを獲得したが、それがどのように活用されていくのかは今後の運動の行方のなかでみえてくることであろう<sup>56</sup>。

## おわりに

テーリー・ダム反対運動は、1978 年に地元住民による生活防衛型の反対運動としてスタートしたが、1980 年代には地域の枠を超えて拡大し、1992 年には「新しい社会運動」としての性格をもつようになった。そうした運動の展開に際し、ガンディー主義の思想・実践が重要な役割を果たしていた。第一に、全インドに広がるガンディー主義者のネットワークを通じた運動への動員が行われた。第二に、インドの公的領域において正統な権威としてのガンディー主義というものがいわば少なくともブランドのようなものとして機能しているために、ガンディー主義者スダルラール・バフグナの断食が政治家への圧力となりたびたび運動の巻き返しのきっかけとなった。第三に、運動の指導者スダルラール・バフグナのガンディー主義思想が、テーリー・ダム反対運動の 1992 年以降の新たな展開に際し重要な役割を果たしていた。すなわちまず、彼のスワラージ思想を背景として運動は、ウッタラカンド地方の「自立」と同時に地元住民自身の「自律」的ライフスタイルの確立をめざすものとなった。また、彼のサルヴォーダヤ環境思想を背景として、「万物の向上」（ウッタラカンド地方の環境改善、地元住民の豊かな社会生活の実現、インド最大の河川ガンガー川の枯渇防

止)を図るべく、アグロフォレストリーの推進が提唱されるようになった。

ガンディー主義は、スワラージやサルヴォーダヤという概念を通じて、また断食や行脚という実践を通じて、インド古来の伝統的な価値に再度光をあてそれらを基盤にしつつも、しかしあくまでも現代的・同時代的脈絡において、十分に戦略的に、具体的に、実行可能で有効なオルタナティヴを提示しようとしているといえる。それが、テーラー・ダム反対運動に「多様な主体」と「新しさ」をもたらしたのである。またバフグナのガンディー主義的メッセージは、インド固有の歴史（特に社会運動史）とヒマラヤ地方の固有の地域的特性を背景としつつも、地域社会の自立と個人の自律の重視、「万物の向上」をはかるオルタナティヴの追求など、普遍主義的な内実を有している。環境問題という全人類共通の今日的課題の解決に向けて、ガンディー主義の思想・実践は今後ますます重要な貢献をしていく可能性がある。

## 注

- 1) ガンディー主義とは「スワラージ (*svarāj*、独立=自治=自己統治)」と「サルヴォーダヤ (*sarvodaya*、万物の向上)」という二つの概念を中核とする社会改革の思想・実践であり、インド独立運動の展開のなかで M. K. ガンディー (1869-1948) によって確立された。ガンディー没後のインドにおけるガンディー主義は、ブーダーン (*bhūdān*) 運動 (地主に土地を寄進させそれを土地なし層に分け与えた) や、全面革命 (*sampūrṇ krānti*) 運動 (インディラ・ガンディー政権の強権政治に対抗した) などのほか、各地の村落再建運動、不可触民制廃絶運動、コミュニアル (宗派対立) 融和のための運動、禁酒運動、女性の地位向上運動などのなかで生き続けてきた。葛西實「マハトマ・ガンディーの平和運動とその後の展開—一つのフィールド・ノート」『アジア文化研究』別冊 3、1992 年、79-90 頁や、林明「ガンディー亡き後のサルヴォーダヤ運動—J. P. ナーラーヤンによる「全面革命」運動の歴史的意義」『アジア文化研究』別冊 10、2001 年、69-94 頁などを参照のこと。
- 2) インドの環境運動のさまざまな潮流については、Madhav Gadgil and Ramachandra Guha, *Ecology and Equity: The Use and Abuse of Nature in Contemporary India*, (New Delhi: Penguin Books, 1995) を参照のこと。
- 3) Deepti Priya, “Local Resistance to the Tehri Dam Project: A Long Term View” (C. S. E. Fellowship Scheme), Unpublished Paper, (CSE Library, New Delhi: Centre for Study of Environment, 1992).
- 4) Shekhar Pathak, “Tehri Dam: Submersion of a Town, Not of an Idea,” *Economic and Political Weekly* August 13, (2005), 3637-3638.
- 5) チプロ運動とは、ウッタラカンド地方の地元住民が 1973 年に域外の企業などによる商業目的の森林伐採を「樹に抱きついて (チプロ *chipko*) でも阻止しよう」と始めた運動である。
- 6) Ramachandra Guha, *The Unquiet Woods: Ecological Change and Peasant Resistance in the Himalaya*, New, expanded edition, (New Delhi: Oxford University Press, 1999 (1989)).
- 7) シェーカル・バータク教授への筆者によるインタビュー (2004 年 9 月 13 日、ウッタラカンド地方ナイニータールにて)。ウッタラカンド地方の社会運動の伝統として具体的には、無償強制労働 (*begār*) 制度撤廃運動、インド独立運動、チプロ運動へと連なる一連の森林保護運動、禁酒

- 運動、採鉱反対運動、ウッタラカンド運動などを挙げることができる (Shekhar Pathak, “State, Society and Natural Resources in Himalaya: Dynamics of Change in Colonial and Post-Colonial Uttarakhand,” *Economic and Political Weekly*, 32(17), April 26, (1997), 908–912)。
- 8) たしかにテーリー・ダム反対運動は特に 2000 年以降、徐々に運動の衰退を経験した (石坂晋哉「インド、ダム水没地テーリーとガンディー主義者」『アジア・アフリカ地域研究』5-1号、2005年、108–113 頁)。しかし本稿は、テーリー・ダム反対運動が 1992 年に「新たな」側面をもつようになったことの積極的な意義を強調したい。
  - 9) Emma Mawdsley, “The Abuse of Religion and Ecology: The Vishva Hindu Parishad and Tehri Dam,” *Worldviews* 9(1), (2005), 1–24.
  - 10) モーズレイはチプロコ運動についてもその「経済的利害」の側面を重視している (Emma Mawdsley, “After Chipko: From Environment to Region in Uttaranchal,” *The Journal of Peasant Studies*, 25(4) July, (1998), 36–54)。
  - 11) 「新しい社会運動」論は、1960 年代以降のフランス、西ドイツ、イタリアなどにおいて出現した学生運動、環境運動、女性運動、地域運動、平和運動などを、主に労働運動との対比のうちに、脱産業社会論や後期資本主義社会分析など現代社会論の一環として捉えようとした研究潮流である。「新しい社会運動」には、(1) 行為主体が多様 (「労働者」「地元住民」「被害者」などに限定されない)、(2) 生活の場の問題が争点とされる、(3) 価値志向運動である、(4) 運動の実践様式自体にメッセージ性がある、などの特徴があるとされている。A. トウレーヌ、梶田孝道訳『声とまなざし—社会運動の社会学』新泉社、1983 (1978) 年；Claus Offe, “New Social Movements: Challenging the Boundaries of Institutional Politics,” *Social Research* 52(4), (1985), 817–68；アルベルト・メルッチ、山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店、1997 (1989) 年を参照のこと。
  - 12) Pathak, “Tehri Dam,” 3638.
  - 13) シェーカル・バータク教授への筆者によるインタビュー (2004 年 9 月 13 日、ナイニータールにて)。
  - 14) Priya, op. cit., 48.
  - 15) ガドギルとグハは、インドの環境運動におけるガンディー主義的なイデオロギーを (「革新的」なマルクス主義的イデオロギーとの対比で) 「保守主義」と規定し、その特徴を「インド的 (東洋的) 伝統を重視し前近代の村落社会への回帰をめざすもの」と述べた (Gadgil and Guha, op. cit.)。それに対し本稿は、そうした捉え方において見落とされている、ガンディー主義の「同時代性・現代性」の側面を浮き彫りにすることを試みる。
  - 16) テーリー・ダム問題の概要とテーリー・ダム反対運動の展開の記述に際しては、筆者の現地調査における聞き取りと上記の先行研究のほか、Vandana Shiva and Kunwar Jalees, “Tehri Dam Project,” *Ganga: Common Heritage or Corporate Commodity?* (New Delhi: Navdanya/Research Foundation for Science, Technology and Ecology, 2003), 25–36; Kushal P. S. Yadav, “Power Point: Experts Have Given Conflicting Reports on the Tehri Dam,” *Down to Earth* 13(7), August 31, (2003), Centre for Science and Environment, 33–35; Tehri Hydro Development Corporation Ltd., Official Site, <http://thdc.nic.in/> (2004/06/21) などを参照した。
  - 17) 1978 年の着工当時はウツタル・プラデーシュ州政府が建設主体であったが、1986 年 11 月にソ

連が資金援助を約束して以降、ダム建設はインド中央政府との共同プロジェクトになった。現在テーリー・ダム建設はインド中央政府とウッタラANCHAL州政府の共同事業となっている。なお、ダムは2006年8月現在未完成であるが、2005年秋以降、部分的に稼働（発電・飲料水供給）を始めている。

- 18) しかし地元では、ダム建設計画に対し、1960年代から建設計画反対の声があがっていた。
- 19) しかし1979年8月の連邦下院解散によりこの請願は失効となった。
- 20) 1985年の最高裁への提訴は1990年に棄却された。また1992年にも最高裁提訴が行われたがこれも2003年に棄却され、最終的にテーリー・ダム建設は合憲とされた。
- 21) 一般的に、「住民運動」は利害当事者としての住民による生活防衛型の運動であるのに対し、「市民運動」はより普遍主義的な価値の実現をめざす市民（高学歴層が多い）の運動であるとされる（長谷川公一『環境運動と新しい公共圏』有斐閣、2003年）。
- 22) 「テーリー・ダムが決壊した際には、22分後にすべての貯水が放出されてダム湖は空になり、63分後には下流の重要な聖地リシケーシュが260mの水底に沈み、その20分後にはさらに下流の聖地ハリドワールも232mの水底に沈む（Sunderlal Bahuguna, “High Dams in Himalaya,” *Save Himalayas, Soil, Water and Pure Air*, (Amritsar: Puran Printing Press, 1995), 10–23, 11)」といったことが主張されるようになったのである。また、その後1991年にはガンガー川の河口ガンガーサーガルから源のガンゴートリーまでを自転車ですたどる「自転車行脚 (*sāykil yātrā*)」が行われた。
- 23) INTACH, *The Tehri Dam: A Prescription for Disaster*, (New Delhi: The Indian National Trust for Art and Cultural Heritage, 1987) には、テーリー・ダム立地点周辺の調査を踏まえた地震学者や地質学者らによるダム建設に批判的な論文が収録されている。また Vijay Paranjpye, *Evaluating the Tehri Dam: An Extended Cost Benefit Appraisal*, (New Delhi: Indian National Trust for Art and Cultural Heritage, 1988) は、テーリー・ダムの費用便益分析によりダムのコストが高いことを指摘している。
- 24) Friends of Chipko (Vandana Shiva, N. D. Jayal, Bharat Dogra and Vimal Kumar), *Ignoring Reason, Inviting Disaster: Threat to Ganga-Himalaya*, (New Delhi: Friends of Chipko, n. d.); Vandana Shiva and Kunwar Jalees, op. cit.; Madhu Kishwar, “A Himalayan Catastrophe: The Controversial Tehri Dam in the Himalayas,” *Manushi* 91, (November–December 1995), 1995, 5–16; Swami Chidananda Saraswati, “Photocopy of Letter Sent by Swami Chidanandaji, Maharaj of Shivanand Ashram to Prime Minister,” *Annexure 51*, in R. Venkataramani (Advocate for the Petitioners) (ed.), *In the Supreme Court of India, Original Jurisdiction, Writ Petition of 1985 (A Petition under Article 32 of the Constitution), In the Matter of: Tehri Bandh Virodhi Sangharsh Samiti and Ors. (Petitioners) Versus The State of U. P. and Ors. (Respondents)*, Volume II, A Personal Collection of Mr. R. I. Singh (Chief Engineer Retd., U. P. Irrigation); Lucknow, n. d. (1978), 335–337 (1–3).
- 25) 特に1985年のクロード・アルヴァレスによるスンダルラール・バフグナのインタビュー記事の影響は大きかった。Claude Alvares, “The Gentle Crusader (Sunderlal Bahuguna’s Interview by Claude Alvares),” in Tinzin Rigzin (ed.), *Fire in the Heart, Firewood on the Back: Writings on and by Himalayan Crusader Sunderlal Bahuguna*, (Silyara, Tehri Garhwal: Parvatiya Navjeevan Mandal, 1997), 35–44.

- 26) スンダルラール・バフグナは、1927年にテーリー近郊の村で生まれ、インド独立運動に参加、その後ウッタラカンド地方において、ガンディー主義者として不可触民制廃絶運動や禁酒運動などを指導しつつ地元住民の生活向上のために働いてきたが、1973年以降は森林保護のチプロ運動を指導して世界的に有名になった人物である。彼は1980年代以降、ガンディー主義のサルヴォーダヤ概念を軸とした「サルヴォーダヤ環境思想」と呼ぶべき独自のガンディー主義的環境思想を培っていった。バフグナの思想内容とその特徴・意義については、石坂晋哉「現代インドのガンディー主義的環境思想——スンダルラール・バフグナのサルヴォーダヤ環境思想」『アジア・アフリカ地域研究』6-2号、2007年（印刷中）、を参照のこと。
- 27) ガンディー主義者たちは、アーシュラム（*āśram*、もともとヒンドゥー教における修行のための隠遁所・道場を指す語）に所属して簡素・禁欲の共同生活を送っている。
- 28) Sanjeev Khagram, *Dams and Development: Transnational Struggles for Water and Power*, (First Published by Cornell University Press in 2004), (New Delhi: Oxford University Press, 2005) を参照のこと。
- 29) バトリック・マッカー、鷺見一夫訳『沈黙の川—ダムと人権・環境問題』築地書館、1998年（1996年）を参照のこと。
- 30) Priya, op. cit.
- 31) Ibid., 42–45.
- 32) Pritish Nandy, “The Old Man and the River,” in Rigzin, op. cit., 9–13, 9.
- 33) “Bahuguna Calls off 45 Days Fast,” *Hindustan Times*, New Delhi, April 13, 1992; “Bahuguna Ends Fast,” *Indian Express*, New Delhi, April 13, (1992); “Bahuguna’s ‘Religious’ Battle,” *The Times of India*, Bombay, April 13, (1992).
- 34) なお、この「ヒマラヤを救え運動」という名称は1980年代後半に始まった有名な「ナルマダーを救え運動」にちなんでいる。
- 35) Sunderlal Bahuguna, “Declaration of Save Himalaya Movement,” *Echoes from the Hills: Save the Himalaya Eco-system: A Call to Humanity*, (Silyara: Tehri Garhwal: Chipko Information Centre, 1992), 10–16.
- 36) Robert D. Benford and David A. Snow, “Framing Processes and Social Movements: An Overview and Assessment,” *Annual Review of Sociology* 26, (2000), 611–639 を参照のこと。なお「フレーム」とは、集合行為、社会運動を正当化し、参加を動機づけるような、参加者に共有された状況の定義、「世界イメージ」や運動の「自己イメージ」のことであり、これを形成するための意識的・戦略的なプロセスが「フレーミング」の過程である（長谷川、上掲書、76頁）。例えば、日本の新月ダム反対運動は、「森は海の恋人」運動という新たなフレームを獲得することで運動の再生が促され、最終的にダム建設計画を中止に追い込んだ（帯谷博明『ダム建設をめぐる環境運動と地域再生—対立と協働のダイナミズム』昭和堂、2004年）。
- 37) バフグナ氏への筆者によるインタビュー（2004年12月23日、テーリーにて）。運動への一般参加者の一人ラーワト氏（仮名）も同様の見解を示している（ラーワト氏への筆者によるインタビュー、2005年2月7日、ニューテーリーにて）。
- 38) Sunderlal Bahuguna, “The Trick Unveiled,” in Rigzin, op. cit., 157–165.
- 39) “Bahuguna Breaks Fast,” *Hindustan Times*, New Delhi, June 28, (1995).
- 40) Bahuguna, op. cit.

- 41) “Bahuguna Ends 74-Days Long ‘Repentance Fast,’” *Indian Express*, New Delhi, June 26, (1996); “Bahuguna Breaks 73-Day-Long Fast,” *Hindustan Times*, New Delhi, June 26, (1996); “Bahuguna Ends ‘Repentance Fast,’” *The Times of India*, Bombay, June 26, (1996).
- 42) 運動参加者の一人ラーワト氏（仮名）への筆者によるインタビュー（2005年2月7日、ニューテリーにて）。
- 43) 石坂「インド、ダム水没地テリーとガンディー主義者」。
- 44) チプロ運動の際には、バフグナのアーシュラムが「チプロ情報センター (Chipko Information Centre)」として機能していた。そこには常駐スタッフ（アーシュラム・メンバーであるアーシュラム付属の小学校教師など）が存在し、そのセンターから多くのパンフレットやブックレットなどが出版された。
- 45) ダム建設工事は以下の期間中ストップした。1978年4月24日-6月1日、1989年12月-1990年1月、1991年12月14日-1992年2月27日、1992年5月-1994年12月、1995年4月14日-5月9日。
- 46) インド中央政府によって設けられた環境評価委員会は次のとおり。(1) S. K. ローイ環境評価委員会（発足1980年2月、最終答申1986年10月）、(2) D. R. プンブラ環境評価委員会（発足1987年、最終答申1990年2月）、(3) V. K. ガウル調査委員会（特に地震学的側面について、発足1996年9月、最終答申1998年）、(4) C. H. ハヌマント・ラーオ調査委員会（特に代替地提供政策について、発足1996年9月、最終答申1997年11月）、(5) M. M. ジョーシー調査委員会（特に地震学的側面について、発足2001年4月、最終答申2002年12月）。このうち前四者は計画見直しを勧告し、最後の M. M. ジョーシー委員会のみが計画の地震学的側面についての安全性を保証した。
- 47) “No More Dams Like Tehri: Tiwari,” *The Times of India*, New Delhi, August 6, (2004).
- 48) アップコ運動については、George A. James, “Appiko Movement (India),” in Bron R. Taylor et al. (eds.), *The Encyclopedia of Religion and Nature*, (London: Thoemmes Continuum, 2005), 101 を参照のこと。
- 49) Sugata Srinivasaraju, “Once There Was a River: Karnataka’s Kali River Peters Out to a Slow, Toxic End,” *Outlook* 45(6), (2005), 22-24, 24.
- 50) Anthony J. Parel (ed.), *Gandhi, Freedom, and Self-Rule*, (Lanham, Maryland: Lexington Books, 2000) を参照のこと。
- 51) 例えば、Sunderlal Bahuguna, “Priorities of IX Plan: A Grassroot View,” in Rigzin (ed.), op. cit., 166-172, 167。
- 52) Sunderlal Bahuguna, *Walking with the Chipko Message*, (Silyara, Tehri Garhwal: Chipko Information Centre, 1983).
- 53) バフグナのサルヴォーダヤ環境思想については、石坂「現代インドのガンディー主義的環境思想」を参照のこと。
- 54) Bahuguna, *Walking with the Chipko Message*.
- 55) 金沢は、スندانルール・バフグナをチプロ運動の「キー・パーソン」の一人と規定した。「キー・パーソン」とは、市井三郎や鶴見和子らの概念であるが、「エリート」や「リーダー」とは異なって政治的権力に関係せず「地域の小状況のなかでのより日常的な変化の担い手」となる人



物を指す（金沢謙太郎「地域環境における抑圧と抵抗をめぐって—インドの環境運動、チプロの論理」、吉田集而編『熱帯林における生物多様性の保全と利用』JCAS 連携研究成果報告 3、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、2000 年、123-136 頁）。

- 56) パータクは、テーリー・ダム反対運動は「失敗」したが、運動の理念の重要性は失われてはおらず、そこからまだ多くを学んでいく必要があることを強調している (Pathak, op. cit.)。